

ひろげよう 支え合い・助け合い つなげよう ゆにふぁんで!

第9回

ゆりりん愛護会
情報労連推薦

2004年4月、宮城県名取市閉上の海岸林焼失地復旧を目的に設立された任意団体で、行政や地域の小中学校、市民団体などが参加する官学民協働の組織。東日本大震災からの復興事業である「みどりのきずなプロジェクト」（海岸防災林再生事業）にも積極的に取り組んできている。

海岸に生きるものの助け合いの精神を
「地域の宝」として次世代に伝えたい

今回のゆにふぁん活動事例は、情報労連推薦の、宮城県名取市を拠点に活動する「ゆりりん愛護会」。2004年の設立以来、海岸林を再生する植樹活動を続けてきた。2020年12月～1月、ゆにふぁんクラウドファンディングにチャレンジし、「生き残ったマツの子どもたちを育てよう! プロジェクト」が成立。2021年10月、「復興植樹祭」を開催して、仙台市荒浜海岸に500本のマツ苗を植えたという。その息の長い活動を支えてきたものは何か、地域の絆をどうつないできたのか。大橋信彦代表に聞いた。



大橋信彦
ゆりりん愛護会代表

地域の自然を守り
愛する(love) nature

活動を始めたきっかけは?

東京で会社勤めをしていましたが、57歳の時に早期退職し、生まれ育った宮城県名取市に帰郷しました。子どもの頃、毎日のように遊んでいた閉上浜では、ハマボウフウという海浜植物が絶滅しかけていました。故郷の海岸とそこで生きるものを守りたいと、2001年8月、「名取ハマボウフウの会」を立ち上げ、海浜植物の保護活動を始めました。3年ほど経った頃、活動区域に隣接した海岸林焼失地の復元を求めて宮城県に要請に行くと、県としても住民の協力が得られるならばということとで認識が一致し、復元に取り組むことになりました。その主体として名取ハマボウフウの会や地域の小中学校が参加する「環境学習

林創造モデル事業運営会議」が設置されました。運営会議は、県の仙台地方振興事務所林業振興部に事務局を置いて、専門家の技術支援を受けながら、クロマツやアカマツなど8種類の苗木計1300本を焼失地に植えていきました。そして2年が経過した2006年4月、運営会議を発展的に解消し、新たに「ゆりりん愛護会」として活動をスタートさせたんです。会の名称は地域の子どもたちから募集し、閉上の「ゆり」と海岸林の「りん」を組み合わせて、「可愛らしい響きの「ゆりりん」に決まりました。活動の目的には「地域の自然を守り愛するところ、地域に奉仕するところを持つ子どもたちを育てていくこと」を掲げました。そして、季節ごとに年に4回、子どもたちと一緒に植栽地の整備を行い、海岸林の役割やその歴史を学ぶ「森の教室」や「森の音楽会」、「キノコ鍋」などのイベントを開催してきました。誰もが苗木が大きく成長していく未来を信じていました。

—そこに東日本大震災が起きた。

ご存知の通り、閉上地区は大津

波で壊滅的被害を受け、一緒に活動していたメンバーも7名が犠牲になりました。海岸林も苗木も無残になぎ倒されました。でも、そんな中でも生き残ったマツの子どもたち(球果)がいたんです。悲しんでばかりではいけない。この子どもたちを育てていこうと、その年の秋には活動を再開しました。生き残ったマツの球果を採取し、以前から交流のあった「白砂青松再生の会」の助けを借りて、福知山市にある京都府緑化センターで育ててもらいました。幼い苗は1年後には移植できるまでに成長し、約5000本の幼苗が名取市に帰り、高館地区の圃場(農作物を栽培するための場所)に移植されました。一方で、私たちは、国や県の復興事業である「みどりのきずなプロジェクト」(海岸防災林再生事業)にも積極的に参加し、仙台市若林区の荒浜や岩沼市の寺島などでも植樹活動を続けてきました。

生き物の力を借りて

この復興を

—復興の状況は?

マツの苗300本を植樹。1週間後の10月31日に、残りの200本を地域のみなさんと植樹しました。子どもたちはハマボウフウや砂浜の希少生物の話を目を輝かせて聞いてくれました。

夢を持つことの
大切さを伝えたい

—大橋代表の活動の原動力とは?

松原が続き、海浜植物の花が咲き、スナガニが走る健康で美しい故郷の海岸を再生したい。その「夢」を抱いて、この20年、無我夢中で活動を続けてきました。自然の中で、遊びを通じて学ぶことは少なくありません。大人が夢を追いかける姿を見て、子どもたちが何かを感じてくれたら、それが最良の教育ではないでしょうか。

—読者にメッセージを。

東日本大震災のショックは今も癒えませんが、労働組合をはじめ多くの支援者のみなさんに出会い、友情を結ぶことに感謝しています。海岸に生きるものたちの支え合いと助け合いの精神を「地域の宝」として、ともに次の世代に伝えていけたらと思います。

—ありがとうございます。



生き残ったマツ(上)とその球果

マツの里がえり



情報労連のみなさんと活動



復興植樹祭

ハード面での復興は進みました。道路や公営住宅が建設され、商業施設もオープンし、新しい街並みが広がっています。しかし、「この復興」は、やっとスタート台に立ったばかりと感じます。海岸林の再生は、被災地の人々の心のケアやコミュニティ復活にもつながるものでありたい。そう考えて、新たな活動を模索し、「生き物の力」を借りたこの復興に取り組んでいます。

マツとシヨウロ(キノコの一種)

は互いの成長を助ける共生関係にあることから、シヨウロ菌を接種したマツ苗を植えてきたのですが、その根本にシヨウロが群生するようになりました。それを見た時、子どもの頃にきのこ狩りを楽しんだ高齢者のみなさんが元気になってくれるのではないかと思ひ、整備作業への参加を呼びかけています。

また、子どもたちとは、砂浜に生息するスナガニの生態観察を始めました。スナガニも宮城県の絶滅危惧種で、久しく姿を消していたのですが、大津波の後、閉上浜に帰ってきてくれました。そんな生命力あふれる生き物たちの力を借りて、よみがえりつつある海岸

の姿を伝えていくことが、この復興につながるのではないかと思っているんです。

—そうした活動をゆにふぁんに掲載し、ゆにふぁんクラウドファンディングにもチャレンジされました。

きっかけは、情報労連宮城県協議会からの協力依頼でした。復興支援に取り組む情報労連のみなさんと連携する場面が増えてい

ました。宮城県では、被災した海岸部にサッカー競技場や野球場を整備してきましたが、県協議会は、そこで地元のプロサッカー選手が教えるサッカー教室を企画しています。それとセットで「復興植樹祭」を開催できないかと相談されたんです。問題は資金集めでしたが、情報労連からゆにふぁんのクラウドファンディングを紹介され、成立させることができました。支援金でクロマツの苗500本を購入したのですが、新型コロナウイルスの感染拡大で2021年5月の開催は延期。秋に再度日程調整を試みましたが、県協議会は、サッカー教室との共同開催は困難と判断し、10月23日に単独で「復興植樹祭」を行いました。情報労連の組合員のみなさんが親子で多数参加し、クロ

